

二〇一〇年度大学入試センター試験 解説 〈現代文〉

第1問 評論 岩井克人「資本主義と『人間』」による

〔総括〕

資本主義の本質とその変遷、そしてその中の「人間」の自己愛の隠された傷について論じた文章。文章量としては昨年よりも減少したが、テーマ・内容的に受験生の読み慣れていないものだった。内容を理解できれば、解ける問題が多く、全体的に昨年よりやや易化した。

問1の漢字は昨年に比べて易しく、満点が狙えるレベル。問2は選択肢も紛らわしくなく、基本レベル。問3の「具体的な説明」を要求される問題は数年ぶりに出題される形式で、問いの意図を理解して答える必要があり、標準レベル。問4は「錯覚」の内容理解を問う設問だが、筆者の主張を理解したうえで解答する必要がある、やや難レベル。問5は選択肢が三行と長い、本文全体にわたる筆者の主張を理解した上で選択肢を見ていけばそれほど難しくない問題で、標準レベル。問6の「文章の表現」を問う問題は、二つの小問で構成されている。(i)ではダッシュ記号「――」の効果が問われているが、「適当でないもの」を選ばせるものになっており、注意が必要だ。選択肢を読みながら正しい効果になっているものを落とし、適当ではない効果と言えるものを選ぶ点で、標準レベル。(ii)の「文章の構成」に関する問いは、選択肢を一つ一つ正確に本文と対照させていけば正解にたどり着ける問題だが、全体的な視野の広さが必要であり、また「消去法」で解かなければならない点で、やや難レベル。問6は「国語表現」に関わる分野を重視する傾向の表れと言えそうで、今後もこうした出題傾向が続くものと予想される。

〔解説〕

問1 漢字問題

昨年とちがって満点を狙えるレベルの漢字が並んだ。このレベルの漢字は満点が取れるよう、日ごろからコツコツ勉強するとともに、文脈判断を踏まえた多角的な漢字の勉強を心がけてほしい。

- | | | | | | |
|--------|-----|------|------|------|-----|
| (ア) 蓄積 | ①増築 | ②逐語訳 | ③含蓄 | ④竹馬 | ⑤牧畜 |
| (イ) 扶助 | ①扶養 | ②赴任 | ③布石 | ④交付 | ⑤不測 |
| (ウ) 滞留 | ①滞る | ②怠る | ③替える | ④耐える | ⑤袋 |

問2 基本

傍線部A「経済学という学問は、まさに、このヴェニス商人を抹殺することから出発した」とあるが、それはどうか。その説明として最も適当なものを選べ。

- | | | | | | |
|--------|------|--------|-------|------|--------|
| (エ) 従事 | ① 充足 | ◎ ② 服従 | ③ 安住 | ④ 縦断 | ⑤ 優柔不断 |
| (オ) 枯渴 | ① 活力 | ◎ ② 渴望 | ③ 一喝 | ④ 割愛 | ⑤ 包括 |
| 正解 (ア) | 1 | ③ | (イ) 2 | ① | (ウ) 3 |
| | | | | ① | (エ) 4 |
| | | | | | ② |
| | | | | | (オ) 5 |
| | | | | | ② |
- (各2点)

まず、傍線部中に「この」という指示語があるので、「この」が指し示す内容を本文に求めると、「ヴェニスの商人が体現している商業資本主義とは、地理的に離れたふたつの国のあいだの価格の差異を媒介して利潤を生み出す方法である。ここでは、利潤は差異から生まれている」という直前の箇所であることがわかる。

つまり「このヴェニスの商人」・「商業資本主義」が体現しているものは、「差異が利潤を生み出す」という方法であり、それを「抹殺する」とはどういうことか、というのがこの設問の意図である。

選択肢を見ると「ヴェニスの商人」・「差異が利潤を生み出す方法」という内容になっていない④は×。⑤もキーワードである「差異」を用いていない点で×してもよいが、少し危険なのでこの段階では残しておいたほうが安全だろう。

次に「抹殺する」という表現が何を意味しているかだが、それは傍線部以降に書かれている内容を読んで判断していくことになる。傍線部の直後に『国富論』の引用があり、それを筆者が説明している箇所を読むと、「スミスは、一国の富の真の創造者を、遠隔地との価格の差異を媒介して利潤をかせぐ商業資本主義ではなく、勃興しつつある産業資本主義のもとで汗水たらして労働する人間に見いだしたのである」とあり、現代文の重要構文である、「Aではなく、B」パターンが見つかる。

- 「Aではなく、B」パターン
Aが筆者の否定する価値観(マイナス)をもつ内容であり、「ではなく」を挟んでBに筆者の主張する価値観(プラス)をもつ内容がくる。

ここではAⅡ「遠隔地との価格の差異を媒介して利潤をかせぐ商業資本主義」、BⅡ「汗水たらして労働する人間に見いだした」。Bの内容は次の文

問3 標準

- で『人間主義宣言』『人間』を中心として展開される」と言い換えられている。この箇所が読み取れば解答は容易になる。つまり、先ほどの「このヴェニスの商人」は「商業資本主義」が体現している「差異が利潤を生み出す」方法を否定し、汗水たらして労働する「人間」を中心として展開されるのがスミスに始まる経済学である、というのが筆者の主張であり、この内容になっている選択肢は③。
- 他の選択肢を見ると、①は「利潤追求の不当性を糾弾する」、②は「重商主義に挑戦する」、④は「国家の富を増大させる行為を推進する」、⑤は「労働者の人権を擁護する」とあり、いずれも「人間の労働を富の創出の中心に位置づける」という内容が書かれておらず、×。
- 正解 6 ③ (8点)

傍線部B「技術、通信、文化、広告、教育、娯楽といったいわば情報そのものを商品化する新たな資本主義の形態」とあるが、この場合、「情報そのもの」が「商品化」されるとはということか。その具体的な説明として最も適当なものを選べ。

傍線部の内容を理解した上で、具体的な説明や具体例として正しいものを選ばせる問題は、数年に一度出題される形式だ。ここで問われているのは「ポスト産業資本主義」の形態であり、その内容としては、「情報そのもの」が「商品化」されるといものだが、これをさらに「具体的」に説明せよという設問。

まず、「情報そのもの」が「商品化」されていくことの意味の説明を本文に求めていくと、傍線部の次の段落に、「商品としての情報の価値とは、まさに差異そのものが生み出す価値のことだ」と書かれている箇所が見つかる。

- 「Aとは」で始まる文は、重要なキーワードであるAの定義が書かれている大切な内容を含む。

ここで定義されている「商品としての情報の価値」とは、「差異そのものが生み出す価値」のことであり、選択肢で具体的に説明されている内容がそうした内容の説明になっているものを選んでいくことになる。

ここでのポイントは「差異」、つまり「他の人と異なっていること」で生まれる価値である点だ。選択肢を見ると、まず②の「誰もが同時に入手できる」、④の「(個人向けに開発された教材や教育プログラムが)一般向けとして広く普及した」という方向性は、個人的な差異を解消していく方向性のもので、正解とは逆なので×。①は「技術」が「商品としての価値をもつ」とあり、情報における「差異」について触れておらず×。③は「広

告媒体の多様化」はいいとしても、「工業生産物」の創造性や卓越性を「広告が正確にうつし出せる」ことが商品価値につながるとあるところが×。ここで問題にされているのは「情報の価値」、つまり「差異そのものが生み出す価値」のことなので、×。

⑤は「多種多様な娯楽のように、各人の好みに応じて視聴される番組」が商品としての価値を生んでいるという内容で、これが「差異」、つまり「他の人と異なっていること」で生まれる価値の具体的な説明になっており、正解。

正解 7 ⑤ (8点)

問4 やや難

傍線部C「伝統的な経済学の『錯覚』」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選び。

まず、「産業資本主義」とはどのようなものかを理解したうえで、次に「錯覚」の内容を具体的にとらえていかなければならない点で、やや難しい設問になっている。

「産業資本主義」については、傍線部の三つ前の段落から説明が始まっているが、ここでは同じ段落に書かれている内容をまずとらえると、「産業資本主義の利潤創出機構を支えてきた労働生産性と実質賃金率とのあいだの差異は、歴史的に長らく安定していた。農村が膨大な過剰人口を抱えていたからである」という箇所が見つかる。これを図式化すると、次のような因果関係であることがわかる。

○原因 農村の膨大な過剰人口

○結果 産業資本主義の利潤創出機構を支えてきた労働生産性と実質賃金率とのあいだの差異の安定

次に、この因果関係が「錯覚」を生む原因になっていることをつかむことが大切だ。

続けて傍線部まで読み進めると、先ほどの「原因↓結果」を受けて、「この差異の歴史的な安定性」が、傍線部C「伝統的な経済学の『錯覚』」を許してしまったのだという次の因果関係があることがわかる。つまり、最初の因果関係全体の内容が次の因果関係における大きな原因となり、さらなる大きな結果を生むという図式だ。

●大きな原因(最初の「原因↓結果」から生まれたもの) ↓大きな結果

これを本文に当てはめてみると、

○大きな原因Ⅱ(原因…農村の膨大な過剰人口↓結果…産業資本主義の利潤創出機構を支えてきた労働生産性と実質賃金率とのあいだの差異の安定)
 ○大きな結果Ⅱ背後に「人間」という主体の存在を措定してしまう、伝統的な経済学の「錯覚」を許してしまった
 となる。※「措定」Ⅱ「推論の前提としてまだ証明されていない命題を置くこと」。

この時点で選択肢を見ると、大きな原因に当たる(原因…農村の膨大な過剰人口↓結果…産業資本主義の利潤創出機構を支えてきた労働生産性と実質賃金率とのあいだの差異の安定)について正確に記述してある選択肢は⑤しかないので、この段階で正解の⑤を選ぶ。

しかし、ここで問われているのは大きな結果の中にある「錯覚」の内容なので、確認のためそれを本文からとらえていこう。ここでの「錯覚」の内容は、直前の「背後に『人間』という主体の存在を措定してしまう」ことである。「措定」という語は非常に定義の難しい語で、一般的には「推論の前提としてまだ証明されていない命題を置くこと」と定義されているが、要するにここでは「人間」という主体の存在を「認める」ことくらいに置き換えて考えていい。

そして、ここでの「人間」という主体は、農村から都市に流出して働く労働者のことであり、彼らの労働によって利潤が生み出されると認め(Ⅱ措定し)、「錯覚」を起こしたのが伝統的な経済学ということになる。この部分の説明として、先ほど選んだ選択肢⑤を見ると、「労働する主体を利潤の源泉と認識してしまった」と書かれており正しい。

他の選択肢を見ると、①「価値を定める主体を富の創造者として実体化」、②「労働力を管理する主体を富の創造者として仮定」、③「大きな剰余価値を生み出す主体を富の創造者と認定」、④「差異を媒介する主体を利潤の源泉と見なしてしまった」など、「人間」という主体や「錯覚」自体に関する説明が間違っていたり、「措定」の語の定義として間違えた解釈をしていたりして、それぞれ×が付く。

正解 8 ⑤ (8点)

問5 標準

傍線部D「『人間』は、この資本主義の歴史のなかで、一度としてその中心にあったことはなかった」とあるが、それはどういうことか。本文全体の内容に照らして最も適当なものを選べ。

設問に「本文全体の内容に照らして」とあるので、全体の趣旨と絡めて解答する視点をもつ必要がある。例年、内容合致問題は最後の問6で出題されるが、今年の問題6では「文章の表現」について問われているので、この問5が内容合致問題に該当するものと考えられる。

内容合致問題は、選択肢を要素に分けて本文と照らし合わせ、○×を判定していく「消去法」で解くが、この問題も「消去法」が有効だ。ここまで

読解してきた本文の内容、そして各問いとも連動させながら選択肢をひとつずつ要素に分けて検討していこう。

①は、「商業資本主義の時代において」と限定した中で、「利潤創出に参加できなかった『人間』の自己愛には深い傷が刻印されることになった」の部分が×。商業資本主義の時代において「人間」が利潤創出に参加できなかったことで自己愛に深い傷が刻印されたのではない。商業資本主義のあとに訪れる「人間」中心の時代においても、一度として人間が中心にあったことがないという事実が自己愛に深い傷を刻印するのだ。

②は、前半部分は問題ないが、後半の「資本主義が傷つけた『人間』の自己愛を回復させようと試みた」の箇所が×。筆者の最終的な結論は、傍線部Dにもあるように、「『人間』は、この資本主義の歴史のなかで、一度としてその中心にあったことはなかった」わけなので、「『人間』の自己愛を回復させよう」という方向性は間違っている。

③は、前半部分が問2の解答を踏まえていてOK。中盤の「そこにも差異を媒介する働きをもった『内在し続けた』の部分も問3の傍線部Bの前後の内容を踏まえている。そして、結論として書かれている「『人間』が主体として資本主義にかかわることはなかった」という方向性も筆者の主張通りであり、これが正解。

④は、マルクスの定義した認識論的錯覚のなかで、「人間」もまた物神化され、資本主義社会における商品となってしまったという結論だが、これは差異がもたらす価値を人間にもあてはめた考え方であり、それはいずれ差異そのものである情報の商品化、つまりポスト産業資本主義へと突き進んでいく過程でのひとつの考え方に過ぎない。筆者は、どの資本主義時代においても「人間」が中心であったことはないと結論付けているのだから、その過程において「人間」が物神化する形で価値を持ち、中心に立つことはなかったはずなので、×。

⑤は、後半の「アダム・スミスの意図した『人間主義宣言』は完全に失効した」の部分が×。繰り返すが、筆者はどの資本主義時代においても「人間」が中心であったことはない、と結論付けているのだから、「アダム・スミスの意図した『人間主義宣言』が失効するものにも、この資本主義の歴史の中で『人間主義』であったことは一度もないのである。また、前半から中盤の理由部分もおかしい。ポスト産業資本主義の時代になり、「価値や富の中心が情報に移行してしまった」ことが理由で、傍線部Dの事態に陥ったわけではない。

正解 9 ③ (8点)

問6 (i)標準 (ii)やや難

(i) 波線部Xのダッシュ記号「——」のここでの効果を説明するものとして適当でないものを、一つ選べ。

問6の「文章の表現」を問う問題は、二つの小問で構成されている。(i)ではダッシュ記号「——」の「効果」が問われているが、「適当でないもの」

を選ばせるものになっており、注意が必要だ。「適当なもの」を選ぼうとして苦戦し、読み間違いのケアレスミスから失点することのないよう、問いは正確に読む習慣を付けておこう。

問われているグッシユ記号「——」の「効果」については、それを本文から読み取ることは難しいので、選択肢の内容を検討し、×が付いたものを正解とする「消去法」で対処していこう。

①の「直前の内容とひと続きである」というのは正しい。「——」は語句の要約・言い換え時に付けられることが多く、ここでは「ヴェニスの人」の定義を「——」の前後で要約する形で用いており、その効果は「語句のくり返しを円滑に導く」という面もある。

②は、①で見たように「——」の前後で要約されている「ヴェニスの商人」について「表現の間を作って注意を喚起し」ている面がある。また、それにより「筆者の主張を強調する効果」も生んでおり、問題なく正しい説明だ。

③は、「ヴェニスの商人」に注目させている点で、「直前の語句に注目させ」は正しく、また「差異を媒介して利潤を生み出す」≠「資本主義」の象徴にあたる「ヴェニスの商人」という「抽象的な概念についての確認を促す」役割を果たしているといえるのでOK。

④は、③同様に「直前の語句で立ち止まらせ」までは正しい説明だが、「断定的な結論の提示を避ける効果」の部分×。「——」のあとを読めばわかるように、筆者は「あのヴェニスの商人の資本主義こそ、まさに普遍的な資本主義であったのである」と、かなり強い調子で断定的な結論を述べている。

(ii) この文章の構成の説明として最も適当なものを、一つ選べ。

「文章の構成」を問う問題は数年に一度出題されるが、これも内容合致問題と同様「消去法」で解いていこう。

①は、前半部分の「人間の主体性」起源にさかのぼって述べ、までは×は付かないが、後半の「商業資本主義と産業資本主義を対比し相違点を明確にした後、今後の展開を予測している」が×。筆者は、商業資本主義と産業資本主義を対比しているだけでなく、その後のポスト産業資本主義についても考察しており、また最終的な結論は問5でも見たように、どの資本主義の時代においても「人間」が中心にあったことは一度もない、と述べている。

②は、「人間が主体的立場になかったことを検証した後、その理由を歴史的背景から分析」とあるのがおかしい。筆者の論の進め方では、「人間」が（どの資本主義の時代にも）主体的な立場になかったと結論付けられるのは最終段落である。

③は、「自己愛に隠された傷」→「差異が利潤を生み出す」資本主義の原理」→「自己愛に隠された傷」についての見解＝傍線部D、という全体の

構成を押えていてOK。これが正解。

④は、「演繹」という語の意味がわかっていれば×できる選択肢だ。

●「演繹」＝普遍的な原理から個々の事実を推論すること。

ここでは、「差異が利潤を生み出すという結論」が「普遍的な原理」に相当することになり、そこから個々の事実を推論する形になっていけば正しい説明であるといえるが、今回の文章の構成としては、そうした普遍的原理から個々の事実を推論する形で展開されていないので×。本文では、資本主義の歴史の変遷を追う、その中での「人間」のありかたを描き、そして自己愛に隠された傷とはどのようなものを説明する構成になっている。

正解 (i) 10 ④ (ii) 11 ③ (各4点)

第2問 小説 中沢けい『楽隊のうさぎ』

〔総括〕

出典は現代作家である中沢けい氏の『楽隊のうさぎ』。主人公である克久は中学生で吹奏楽部の部員。克久が他の部員たちとともに練習し夏の大会に臨む際の緊張感や、大会に出て日々成長していく姿が描かれ、またそれを見守る母とのアンビバレントな関係が描かれている。文章量は昨年並みだが会話部分が多く、また少年を主人公とする小説であるため、受験生には読みやすいものであった。しかし、設問に目を移すと選択肢に紛らわしいものが多く、主観的な読解ではミスを連発する可能性が高いため、全体では昨年並みのレベルといえる。

問1は基本～やや難。語句問題は文脈判断より辞書的な意味が優先するが、今回問われている語句は受験生にはあまりなじみのないものが入っており、知識の差が得点差となって表れることになる。問2は標準レベルの問題。選択肢が短く一見容易に見えるが、一語一語を正確に捉えないとミスしてしまう。問3は標準レベルの問題で、傍線部にいたった理由のとらえ間違いに注意したい。問4は基本レベルで、前後の文脈を正しく読み取れば正解できる。問5は標準レベルだが、選択肢が三行にもわたっているため、選択肢を吟味するときに要素に分けて、消去法も併用して慎重に正解にたどり着きたいところ。

問6の「文章の叙述」を問う問題は、「適当でないもの」を一つ選んで正解するのはやや難のレベル。正しい選択肢と誤った選択肢をかなり慎重に見分けしていく必要がある。

問1 語句問題

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろからいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。

(ア)の「いわく言い難い」は、②「言葉では表現しにくいと言うほかはない」が正解。文脈的には、①の選択肢も当てはまるように思えるが、辞書的な意味を正確に押さえていないので×になる。「いわく言い難い」は「なんとも言葉では簡単には説明できない」の意。

(イ)の「和声理論の権化」は、④「和声理論を的確に具現した演奏」が正解。「権化」は、「ある抽象的な性質が、具体的な姿をとって現れたかのよう」に思える人やもの」の意で、「悪の権化」などと用いる。これは特に「権化」の意味を知っていないと正解できない問題だ。

(ウ)の「みもふたもない」は、③「露骨すぎて話にならない」が正解。これは日常でもよく使う慣用表現で、文脈判断的にも正解できるはずだ。

正解 (ア) 12 (イ) 13 (ウ) 14 ③ (各3点)

問2 標準

傍線部A「音が音楽になろうとしていた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

本文の内容を問う最初の問題だけに、書かれている内容をしっかり把握してから解答するようにしたい。その場合、前書きも重要なヒントになるので、前書きに書かれている場面や状況、人物関係などを整理して自分の頭の中に小説世界を想像し終わってから本文に入るようにするのがコツだ。ここでは、主人公の克久が吹奏楽部に入り、夏の大会をめざして森勉先生の指示のもと猛練習し、次第に上達していく様子をとらえよう。

場面や状況をとらえただけで、ここではまず傍線部の直前に「つまり」とあるところに着目しよう。「つまり」は直前の言い換え・要約をあらわす接続語なのでまとめると、

●「悔しいとか憎らしいとか、そういういらいらするような感情は一つもなくて、大きな哀しみの中に自分がいるように感じた」
つまり、

傍線部A「音が音楽になろうとしていた」

となり、直前の具体的な説明をまとめたものが傍線部だとわかる。直前の内容をまとめると、「個々のいらいらする小さな感情（不純な感情）がなくなり、一つの大きな感情（純化した感情）の中にいるように感じられた」ということであり、選択肢では①の「純化した感情」にあたる。他の選択肢にはこの内容に該当するものがないので、ここを正確にとらえられればいきなり正解できる。

ただこれだけだと決定打に欠けるので、本文に戻ってもう少し検討してみよう。傍線部の三行前に「ばらばらだった音が、一つの音楽にまとまる瞬間」とあるのが見つかる。これは傍線部と近い内容で、ここで「ばらばらだった音が、一つの音楽にまとまる」ためには、指揮者の指示のもと、各パートでばらばらだった音が一つの音楽として調和することが必要であり、そうした説明になっているものは①「融け合い」と④「調和」の二つ。⑤は「精妙に組み合わさり」はいいとしても「個性を保ちつつ」が本文になく×。また、②や③のように単に「演奏が洗練」「演奏が上達」だけでは要素が不足している。また、「ばらばらだった音が、一つの音楽にまとまる」ためには、指揮者の細やかに出す指示が必要であり、その点でも③・④・⑤を落とすことはできる。

ちなみに正解の選択肢①の中の「具象化した感覚」というのは、傍線部の二行前に書かれている「枯れ草の匂い」「斜めに射す入り陽の光」のことを指している。

問3 標準

正解

15

①

(7点)

傍線部B「怒られるたびに内心で『ちゃんとやってるじゃないか』とむくれていた気持ちがすっかり消えた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを選べ。

理由説明問題の場合、結果にいたる原因の箇所を正確にとらえるのが大前提になる。因果関係には大きく言って次の二つのパターンがある。

●因果関係

- ①原因↓結果 いわゆる順接の関係で、「したがって」「だから」などの接続語で結ばれる場合が多い。
- ②結果↓理由説明 先に結果を述べておき、後で「なぜなら〜だから」という形で説明するもの。

今回の傍線部Bにいたる原因が何かを本文から読み取ると、普通はどちらか一方だけに書かれている原因が、今回は傍線部の前後二箇所に書かれていることがわかる。時間の経緯に沿った形での記述になっていない点でこうしたことが起きているが、小説でよくある展開なので、正確な読解を心がけてほしい。

まず、傍線部の四行前に「一年生にもようやく自分たちが求められているものがどの水準にあるのが解った」とあるのが一つ。二つ目は、傍線部の次の段落冒頭に「スゴイ学校は他にいくらでもあった」とあるように、克久たち一年生は大会に参加して他校の優れた演奏を聴き、そこで初めて自分たちの演奏がまだまだであることを自覚したという理由だ。この二つの理由を的確にとらえている選択肢①が正解。

①は、傍線部中の「怒られるたびに内心で『ちゃんとやってるじゃないか』とむくれていた気持ち」に対応する説明として「日々の練習をきちんと積み重ねているつもりでいた一年生だったが」とあるところも正しい。

他の選択肢を消去しておこう。②は最後の「あらためて先輩たちへの信頼を深めたから」が傍線部にいたる理由としては決定的に間違っている。「先輩への信頼」が傍線部分の理由にはなっていない。③は、「それまでばらばらだった〜地区大会で初めて経験した」の箇所が×。音が音楽としてまとまる瞬間を感じたのはすでに練習段階でのことであり、これは問2で問われている内容だけに×できてほしい。④は、「これからの練習を積み重ねていくことで〜目標を改めて確認し合った」が×。この箇所は傍線部の理由ではなく、傍線部で感じたことを発展させた内容といえる。⑤は、前

半部分が①と同様の内容でOKだが、後半の「自信をもって演奏できるほどの練習はしてこなかったと気づいたから」は×。自信を失ったことでもくれている気持ちが消えたわけではない。

正解 16 ① (8点)

問4 基本

傍線部C「初めて会った恋人同士のような」とあるが、この表現は百合子と克久のどのような状態を言い表したのか。その説明として最も適切なものを選べ。

会話が続いたあとの傍線部なので、そこまでの百合子と克久のやりとり、そしてそれぞれの心情を読み取ることがポイントになる。傍線部までの流れをまとめてみよう。まず、克久の母親である百合子は帰宅した克久の様子から「たちまち全てを了解し」トンカツを揚げたことを後悔する。一方の克久も大会を前に「いつもの夜と同じように自然にしてほしい」と全身で語っている。その後二人は適当な会話を交わしながら、互いに「……」と沈黙するなど、ぎこちないムードが流れ、傍線部Cにいたる。ここで「初めて会った恋人同士のような」という表現に込められた内容は、互いにどう言えば相手に自分の気持ちが伝わるかがわからない状態、つまり「もどかしく、とまどっている状態」と言える。そうした説明になっている選択肢は①「もどかしく思っている」、②「とまどっている」、④の「きまり悪さを感じている」、の三つ。③の「悔やんでいる」、⑤の「笑い出したくなっている」はいずれも外的な説明なので×。③は前半部分が問題ないだけに、「悔やんでいる」の箇所が消去しないと選んでしまう可能性が高いので気をつけてほしい。

次に傍線部の後を読むと、直後に「それにしても、百合子も克久もお互いを知り過ぎていた」とあるところがポイント。「初めて会った恋人同士のような」変な緊張感を感じながらも、「お互いに知り過ぎていた」という関係で、こうした矛盾した感情が交錯するところにこそ小説の心情問題の鍵がある。つまりここでは、長い親子関係で互いにわかり合っているはずなのにうまくコミュニケーションが取れないという矛盾が、「初めて会った恋人同士のような」緊張感を作り出している原因であることをとらえることがポイント。こうした説明になっているのは②で、これが正解。

①は、「自分の好意を相手にきちんと伝えたい」と思っているのは母親の心情説明としては正しいが、克久のほうは「いつもの夜と同じように自然にしてほしい」と願っているだけなので×。④は、「恥ずかしくてわざと気付かないふりをしている」わけではないので×。「気付かない」のではなく、どう表現してよいかに困ってとまどっているのである。

正解 17 ② (7点)

問5
標準

傍線部D「少年の中に育ったプライドはこんなふうには、ある日、女親の目の前に表れるのだった」とあるが、その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部Dは本文の最後の一文に引かれており、ここまでの流れをつかんで解答する問題といえる。選択肢が長いので、要素に分けて本文と対照させ「消去法」で解くほうが時間の節約にもなり、正答率も高くなる。選択肢を要素に分けて「消去法」で解いていこう。

まず、確実に消去できる要素をもつ選択肢としては、②の「自分がかけがえのない存在であるという自覚」、③の「克久のおごりと油断」「他人を寄せつけないほどの緊張」「息子の気負いをなだめ、落ち着かせなければならぬ」、⑤の「どんなことにも動じない自信と気概」「百合子を遠慮させるほど堂々とした少年の姿」「錯覚」がある。選択肢が長いことに惑わされなければ、②・③・⑤の三つの選択肢を×して消去することは容易なはずだ。

残った①と④の二つは丁寧に見ていくことが必要だ。

①で問題になるのは「意気込みと不安」「張り詰めて折れそうな心を自覚」「幼いと思っていた息子が知らないうちに夫に似てきたこと」という要素。一方の④では、「りりしさともろさ」「高まった気持ちを静かに内に秘めた」「理解しているつもりでいた克久ではない成長した少年の姿」が検討材料になる。

こうした長い選択肢の場合は、どうしても印象で全体をとらえてしまう危険があり、小説の場合はそれが致命傷になって失点を招いてしまう可能性が高いので、必ず選択肢を要素に分けて正確に本文と対照して客観的に○×を付ける訓練をつんでほしい。センター現代文では、「本文に記述されていない(あるいは対応する表現がない)要素は×」というのが鉄則だ。

●消去法で○×を付けていく場合、本文に書かれていない、あるいは対応する表現がない場合は×になるのが鉄則。

では、先ほどの選択肢①と④の各要素が本文中に書かれているか、別表現で言い換えられているかを正確に見ていこう。傍線部にもっとも近い箇所書かれている内容には、克久の成長に対する百合子の感想がある。本文では「久夫に似てきたが、よく知っている克久とは別の少年がそこにいるような気もした」と書かれている箇所がそれに当たる。①では「幼いと思っていた息子が知らないうちに夫に似てきたこと」、一方の④では「理解しているつもりでいた克久ではない成長した少年の姿」と書かれている。この二つを比べると、④のほうが本文に書かれている内容に近いが、①が×というほどではなく、ここでは消去できない。

次に、①の「張り詰めて折れそうな心を自覚」と④の「高まった気持ちを静かに内に秘めた」とを本文に根拠を求めると、「普通そうになっているけれども、全身に緊張があふれていた」「こんなに穏やかな精神統一のできた息子」の箇所が見つかる。この本文の記述を踏まえた説明になっているのは、④のほうで、①のような「張り詰めて折れそうな心を自覚」に該当する記述は本文に見つからず、ここで×が付く。正解は④。

ちなみに残った要素である、①の「意気込みと不安」、④の「りりしさともろさ」の二つに関しても、本文では「ぶつんと糸が切れる。そういう種類の緊張」・「もろさ」、「一人前の男である。誇りに満ちていた」・「りりしさ」と置き換えられるように、④の説明が正しいので、この箇所を落とすことも可能だ。

正解 18 ④ (9点)

問6 基本～標準

この文章の叙述の説明として適当でないものを、次のうちから二つ選べ。

新課程になってから、小説の最後の問題はこうした「叙述の説明」や「表現の特徴」について問うものが連続して出題されている。また昨年同様、今年も正解を「二つ」選ぶ形式になっている。ただし、「適当でないもの」を選ぶことに注意しよう。

解法としては、選択肢を要素に分けて○×を付け、基本的に消去法で解くのが確実。また、選択肢同士を比較して解くという視点も有効だ。間違いの選択肢と、×が付く箇所をあげていこう。

③は「克久の経験した順序で叙述されており」が×。問3の解説にも書いたように、時間の流れに沿って記述されていない箇所がある。具体的には「地区大会の翌日」の記述が先にあり、その後「地区大会当日の様子」が書かれている箇所は時間の経緯が逆転している。

④は「直喩だけを用いて隠喩を用いないこと」で、音楽の描写をわかりやすいものにして「が×」。「直喩」とは「ようだ・ごとし」などを用いて物事をたとえることで、「隠喩」とは「ようだ・ごとし」などを用いず物事をたとえること。たとえば、「雪のように白い肌」と言えば直喩で、「雪の肌」と言えば隠喩ということになる。

本文の15ページを読むと、「一本の地平線を見事に引いた」「木管は風になびく軍旗だ」など「隠喩」が用いられた表現があるので④は×になる。これを正解として選ぶには「直喩」と「隠喩」に関しての正確な知識と、それを本文から読み取る力が必要になる。センター小説では修辞法に関する問題が頻出なので、知識としてぜひ仕入れておいてほしい。

他の選択肢はすべて正しい説明になっている。①でのカタカナ語の説明は問題なくOK。②の「……」の効果についての説明も正しい。⑤の「文

末が「現在形」になっていることの説明はちよつと迷うが、本文で該当箇所を確認すれば、その表現よつて「読み手がより共感しやすくなっている」と感じることもできるはずだ。⑥の「恐竜と宇宙飛行士」の大きな対比の説明も問題なくOKだ。

正解

19

・

20

③

・

④

(順不同)

(各5点)